

# 石上 寮一 ツエラン・アンソロジー

[Translation]  
ISHIGAMI, Ryoichi  
P. Celan Anthology

A Noon of Liberal Arts, No. 9, 2019

フリンカー書店のアンケートへの回答（一九五八年）

わたしの目下の仕事と計画についてお尋ねくださるのがあります。いいことです。しかしその質問の相手はというと、これまで世に問うてきたものとしては詩集が三つあるだけです。したがってわたしにできるのは、本題から逸れぬようある程度は努めますならば、ひとえに詩人として答えを探すことです。

ドイツの詩歌は、わたしに思うに、フランスのそれとは別の道をゆくものです。きわめて暗いものを記憶に留め、きわめて怪しいものに取り巻かれ、ドイツの詩歌は、その置かれている伝統がありありと思ひ浮かぶにもせよ、多くの愛好家がいまだに期待しているらしい言葉話を話すわけには、もはやいきません。わたしたちの言葉は、より冷静で、粉飾のないものになったのであり、「美しい」ものに

信を置かず、真実であろうと努めるのです。つまりそれは、どうやら流行している多彩なものに注意しつつ、視覚的な表現を用いてよいとすれば、より「灰色」の言葉であり、またそのとりわけ「音楽性」についていえば、きわめて恐るべきものを間近にしながら、程度の差こそあれ、いまだに呑気に鳴り響いていた従来の「妙なる調べ」とはもはやなんの関係もないのだとわきまえた言葉です。

この言葉にとって問題なのは、桁外れな表現をすることがあろうとも、厳密さです。この言葉は明るくしません、「詩的」にすることもありません、この言葉は、名づけ、位置づけ、既存のものと同能なるものとの範囲を測定しようとするのです。当然、ここで働いているのは、言葉自体、言葉そのものなだけではけってなく、つねにひたすら、輪郭と針路とが問題である、おのれの生存の特殊な角度のもとに話す《わたし》です。現実はあるものではありません、現

実は、追い求められ、勝ち取られねばならないのです。

しかしこれでもうずいぶん脱線しておりましょう。われながら詩人とは困ったものです。結局、この種の手合に対しては、いつの日か一篇のまともな小説を著わすよう、やはりそう期待せずにいられないわけです。

パウル・ツエラン

手紙（一九六〇年）

ハンス・ベンダー様

五月十五日付けのお手紙と、ご編纂の選集『わが詩はわが刃』へ参加されたしとご厚意に感謝申し上げます。

かつてこう申したのを覚えております。詩人は、詩が出来上がった瞬間、その起源について与り知るものではなくなるのだと。いまのわたしならおそらく、この見解を別様に表現したり、それについて事細かに述べようとしたりすることでしょう、ですが基本的には、わたしはいまなおこの——古来の——見解です。なるほど今日において、呑気千万に手仕事と呼ばれるものが一方ではあります。しかし——思考し、経験してきたことを一言で要約させていただきます——手仕事とは、そもそも丁寧さがそうであるように、あらゆる文学の前提なのです。この手仕事に、盤石の土台などはありません——そもそも土台があるのかさえ、わかったものではないのです。そこに開かれているのは、奈落にして深淵です——大勢の作家が（わたしはその一員ではないのですが）そのために名を揚げてさえます。手仕事——ことは手に関わるのです。そしてこの手の持ち主はいえ、一個の人間、つまり一回きりであり、死すべきである、おのれの声と沈黙とともに道を探す魂の存在あるのみです。本物の手だけが本物の詩を書くのです。握手と詩のあいだにわたしは根本的な違いを認めません。

ここでわたしたちは、「クリエイトする」等々の言い方に乗せら

れないことです。それは、関連する諸々をひつくるため、今日の文脈におけるのとはなにか別のことを意味していたのだらうからです。

疑いなく、祈禱というものはあります——精神的な意味です！ハンス・ベンダー様。それにひきかえ、あちこちの詩的銜角で、言葉をだした見境のない実験がおこなわれております。

詩とは、贈りもの——心あるひとたちへの贈りものだとはいえます。運命を運ぶ贈りもの。

「どうやって詩をつくるのか？」

「つくる」ことが、しだいに小細工になり、やがては策略となっていくのを、わたしは数年前、しばらくのあいだは近くで観察し、またのちになっていくらか距離をおいて、正確に看取ることができました。そう、たしかにそのようなこともあるのです、あるいはご承知のことと思います。——そのようなことになるのにもわけがあります。

わたしたちは暗い空のもとに生きています、そして——人間はわずかしこいませぬ。だからこんなにも詩が少ないのでしょうか。わたしがいまお抱えている希望は、大きくはありません。わたしはわたしに残されたものを育むよう努めることにします。

ご多幸を、そしてよき仕事を

パウル・ツェラン  
拝

一九六〇年五月十八日、パリ

フリンカー書店のアンケートへの回答（一九六一年）

言葉について、思考について、文学についてお尋ねですが、お尋ねのしかたが簡潔です——ですので、回答も同様に簡潔なものとしてください。

文学における二言語併用ということをおわたしは信じていません。

二枚舌——そう、それならあります、この時代のさまざまな言語芸術ないしは芸術的詐欺のなかに、わけても、そのときどきの文化消費に嬉々として迎合しつつ、目もあやに言葉を使い分けてのける芸術的詐欺のなかにです。

文学——それは、言葉は宿命的に一回だということですが。つまり——このわかりきったことを述べるのをお許しくください、なにしろ文学は、真実ともども、今日あまりにしばしば見失われがちなので——つまり二回ではありません。

パウル・ツエラン

„Antwort auf eine Umfrage der Librairie Flinker(1958)” (p.77),  
„Ein Brief(1960)” (pp. 79-80) & „Antwort auf eine Umfrage der  
Librairie Flinker(1961)” (p. 81) from:

Paul Celan, Werke. Historisch-kritische Ausgabe. I. Abteilung:  
Lyrik und Prosa - Band 15: Prosa I. Zu Lebzeiten publizierte Prosa  
und Reden.

© Suhrkamp Verlag Berlin 2014

